

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 趙 慶

本論文「源氏能の胎動と展開—《葵上》《野宮》《夕顔》《朝顔》《半蔀》を中心に—」は、『源氏物語』を本説とする能（源氏能）から《葵上》《野宮》《夕顔》《朝顔》《半蔀》の五曲を選び、各々の特質を述べた上で曲と曲の関わりおよび成立順序などについて論じたものである。論文は五章から成り、序論と結論を備える。末尾に注記と参考文献一覧を付す。各章ごとに上記の一曲ずつを取り上げて論じる構成をとる。中世以降、『源氏物語』は必須の教養として位置づけられてゆくが、源氏能における『源氏物語』享受のあり方は一様ではない。本論文は能の詞章はもちろん、本説の『源氏物語』やその注釈書・梗概書の類を丁寧に検討することで、源氏能の作者が依拠した『源氏物語』本文や関連知識の内実に具体的に迫っている。また、能についてはそれぞれの曲が個別に論じられるものが多い中で、本論文は曲同士の関係に着目し、互いの曲に共通する表現の指摘、あるいは一つの曲の成立が次の曲の制作を促す契機となった例の指摘など、源氏能が成立してゆく様を動的に捉えようとする試みであるところに特色がある。

本論文第1章「源氏能の胎動—《葵上》の劇作の特徴と改作」では、世阿弥の『申楽談儀』における犬王所演《葵上》への言及を手がかりに、改作の問題を論じる。後妻打ち、怨霊調伏など本説の『源氏物語』には見られない場面を再検討した上で、《葵上》の改作が特に演出の面を中心に行われたことを指摘する。本曲が本説の『源氏物語』と隔たりがあることについては、初期の源氏能と言える《葵上》の段階では観客側の『源氏物語』理解が十分でなかったことに加え、物語に忠実であることよりも後場に見られるような「後妻打ち」などの演出の方が興行上好まれたためではなかったかと推測する。尚、「後妻打ち」については審査委員から、僧による鎮魂・浄化の構造など、仏教的世界観も含めた広い視野からの再考を求める意見があった。また、車などの舞台装置についての考察が不十分である点も指摘された。

第2章「源氏能の進展—《野宮》の作者と演出の諸相」においては、車争いと野宮での別れを題材とする《野宮》の後場が、先行する《葵上》をふまえて制作されたことを確認し、《葵上》と《夕顔》の中間に《野宮》が位置づけられることを論じる。また、《野宮》の詞章と『源氏物語』諸本との比較を通じ、《野宮》の詞章は青表紙本系の本文を基に制作された可能性を指摘する。これは第3章で扱う《夕顔》が河内本系の本文を持つのと対照的であると言える。本曲で青表紙本系本文が採られていることについては、審査委員から、《野宮》の作者と推定される金春禅竹と正徹の交流も考慮すべきであるとの意見があった。

第3章「源氏能の深化—夕顔物語の中世的理解と《夕顔》の成立」においては、初期の《葵上》の段階では本説の『源氏物語』とかけ離れた筋書であったのに対し、この《夕顔》においては本説の表現を積極的に取り入れていることに本論文は注目し、それは制作者の

みならず能の観客における『源氏物語』理解の浸透が背景にあることを指摘する。また、先にも触れた通り、《夕顔》の詞章は『源氏物語』の諸本のうち、河内本系の本文に近いことを具体的な例を示しながら論じる。

第4章「源氏能の多様化—《朝顔》の制作と朝顔尽くし」においては、《朝顔》における「朝顔尽くし」の趣向を連歌的発想と技法に注目しながら論じる。また、作者と目される太田垣能登守忠説について、その著書『尋流抄』などを読み解きながら宗砌、正徹、一条兼良との交流を論じる。その交流の中で、《夕顔》の存在に触発されて《朝顔》が制作されたのではないかと述べる。

第5章「源氏能の展開—《半蔀》の題材の活用と作者の素養」では、《半蔀》の詞章に現れる「折りてこそ」の語を手がかりに考察する。『源氏物語』夕顔巻の和歌「寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔」の初句は「寄りてこそ」と「折りてこそ」の異同があり、『細流抄』や『孟津抄』などの注釈書は前者を、『源氏大鏡』や『源氏物語提要』、『源氏最要抄』などの梗概書は後者を採る。《半蔀》の詞章「折りてこそ」は梗概書に一致し、これらの影響が考えられることを指摘する。また「折りてこそ」の表現を繰り返し用いることは結果として、《朝顔》に見られる「この花を一本手折らばや」、「折らで過ぎ憂き今朝の朝顔」などの場面を連想させる効果を生んだのではないかと述べる。

以上、本論文は堅実な考察を通して、《葵上》に始まる源氏能の五曲が他の曲の影響を受けながら展開する様を明らかにした。その展開は源氏能の作者および観客における、本説の『源氏物語』への理解が進んでゆくこととも重なる。源氏能が依拠した本説の『源氏物語』本文、梗概書などについては曲によって必ずしも一貫しておらず、さらに整理が必要であろうが、各曲の作者がそれぞれ異なる背景で『源氏物語』を読んでいたことは本論文の考察から明らかである。

尚、本論文は題目に掲げる五曲を扱ったものであるが、審査委員からは《須磨源氏》《浮舟》など他の源氏能が考察の対象に入っていないのは「胎動と展開」を論じるには不十分であるとの指摘があった。また、本論文は源氏能の詞章すなわちテキストの研究にやや偏っており、もっと舞台の印象を重視した身体論の立場からの検討を加えるべきであるとの意見もあった。しかし、それらはむしろ本論文を踏まえた上での今後の研究課題と言え、本論文の価値を損なうものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は全員一致して、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。